

# 曙光



1997. 10. 1

東北大学大学教育研究センター広報 No. 4



創造工学研修発表会風景

川内北キャンパスでの学生生活 …… 大学教育研究センター長 江 幡 武 ……	2
学生の健康管理について — 定期健康診断からみた学生の健康状態 —	
…………… 保健管理センター所長 三 浦 幸 雄 ……	3
主な行事予定 ……	5
学生からの投稿	
…………… 経済学部 4 年生 大 澤 幸 子 ……	6
…………… 歯学部 4 年生 竹 屋 静 枝 ……	7
…………… 工学部 4 年生 金 田 日 奈 子 ……	8
…………… 経済学部 2 年生 大 谷 建 之 ……	9
…………… 経済学部 2 年生 大 坂 紫 ……	9
…………… 工学部 4 年生 赤 間 鉄 宏 ……	10
…………… 工学部 3 年生 松 本 圭 次 ……	10

## 川内北キャンパスでの学生生活

大学教育研究センター長 江 幡 武

夏休みも瞬く間に過ぎ去り、皆さんはそれぞれ元気に第2または第4セメスターを迎えられた事と思います。振り返って見て、これまでの、主として川内北キャンパスで学習してきた全学教育科目の印象はどんなものでしょう？大学での生活は予想した通り刺激に満ちていたでしょうか？

現在のカリキュラムは実施に移して今年で5年になります。ほとんどすべての学部で、最初の1～2年間は、学部の専門科目、教養科目、基礎科目、外国語科目が平行して開講されていて、恐らくかなり忙しい毎日を送っているのでは無いでしょうか。5年目を迎えて、大学教育研究センターでは、キャンパス生活が一層充実したものになるために、改善を計画しています。そのために、皆さんのご意見をアンケートの形で調査したいと考えています。後輩のためになることですので、ご協力いただきたいと思います。自由記述欄にも忌憚の無いご意見をお寄せいただきたいと思います。

上の文章で「充実したキャンパスの生活」という表現で、大学側が更に窮屈なカリキュラムを押し付けるのでは無いかと、心配される諸君もいるのでは無いかと思しますので、若干個人的な意見を述べておきましょう。皆さんが大学に入学した前後は、自立した人格を確立するのに、とても重要な数年です。学校での講義、あるいはサークル活動などを通しての友人との交友を契機に、自分をしっかり見つめる時間が必要です。暇を作り、それを有効に活用できることが重要と思います。私の経験では、授業で話題になったことで、これまで縁の余り無かった分野の本を読むきっかけができたこともあります。このころ読んだことは、いつまでも記憶に残ることが多いので、結局現在の（極めてお粗末ですが）教養の基礎となっていると実感しています。教養教育科目の履修は、自分で勉強しようとしている専門の履修にはむしろ負担で邪魔になっていると考えている諸君も少なくないかも知れませんが、これからの長い人生、職業生活では、他分野に対する理解、総合的視野といったものが、大学で学ぶ専門知識に劣らない重要性を持っていると思います。このような教養科目を、現在よりも高学年次で、希望すれば履修できるシステムはいかがでしょう。

全学教育科目としてその他に外国語、基礎教育、転換教育科目などが設けられていますが、興味や学習意欲を引き出すように設定されているでしょうか。皆さんの中には、「入学」という目的を達成してしまって、キャンパスでの生活を十分エンジョイできない人も居ると聞きます。大学教育研究センターとしては、必要でありながら、欠けているものを可能な限り整備するよう心掛けて行きたいと思って居ます。

# 学生の健康管理について

## — 定期健康診断からみた学生の健康状態 —

保健管理センター所長 三 浦 幸 雄

### 学生の健康管理とは

厚生白書をみるまでもなく、18歳から25歳くらいまでの青年期は男女とも最も罹病率（病気にかかる人の割合）の低い年代である。確かに、この年代にある学生諸君の多くは、身体の諸機能が充実し、疲労の回復も早く、体力に不安を覚えるなどということは無縁であろう。人間の一生の中でも、この年代は生物学的な身体機能がピークに達している時期であり、日常の健康管理に関心があるなどという学生は、むしろ例外的であろう。しかし、全ての事象がそうであるように、身体機能についても最盛期が永く続くことはあり得ず、ピークの後には長いダウンヒルのみが続く。ダウンヒルでの行程は頂上に立った時の状況判断により大きく左右される。学生諸君は、健康保持という面でも、今、大切な局面に立っていることを自覚しなければならない。学生諸君の「健康管理」とは、第一に、現在の健康状態をできるだけ高め、下りの勾配をできるだけ小さくするような生活習慣を身につけ将来に備えること、第二に学生という特殊な生活環境の中で起こりうる健康障害を理解し、その予防と対応の方法を身につけること、第三に、責任ある社会人としての心身の行動規範を確立すること、に集約される。

### 定期健康診断からみた学生の健康状態

保健管理センターでは、全学生を対象として定期健康診断を実施している。検診の後には何らかの異常が発見された学生を対象として二次検診を行い、健康指導を併せて実施している。その他に、有機溶剤、放射線、VDTなどを実験で使用する学生に対しては、それぞれ特別健康診断が追加実施されている。これらはいずれも法令により学生に対し義務づけられているものである。

健康を誇る学生諸君ではあるが、これらの検診により異常が指摘される学生も少なくない。例えば、平成7年度の検診により集計された罹病率は、体重異常（肥満、やせ）1.19%、高血圧1.06%、心臓疾患0.55%、呼吸器疾患0.28%、腎疾患0.25%などである。これらの頻度は一見低いようにもみえるかもしれないが、体重異常のうち肥満指数（BMI）26.4以上の軽症肥満の頻度は4.4%に、BMI 17.6%未満のやせも2.3%に認められた。血圧も正常高値域（収縮期血圧130～139mmHg）以上を示す学生は一次検診では約20%程度にみられる。呼吸器疾患のうち、集団生活で最も重要な肺結核は4名発見された。

これらからみえてくる本学学生における健康問題としては、肥満と高血圧に代表される生活習慣病（成人病）の罹患者やその予備群が実数で1,000名以上に及ぶこと、少数ではあるが新規の肺結核が発見されること、などが特に注目されるべき点である。

ところで、定期検診の受診率は学部の1、4年生、大学院（M2）では、例年80～87%とかなり良好であるが、他の学年では40～70%台に低迷している。このような受診率のバラツキには、奨学金や進学、就職のための健康診断書めあて（年間5,000件以上に達する！）や臨床実習のため受診が義務づけられている（医、歯、医短）など、受診動機の有無が大きく関係しているとみられ、健康管理という本来の目的が十分に理解されているとは必ずしもみなされない。この機会を通じて、学生諸君の自覚を促したい。

### 生活習慣病の若年化

周知のように、わが国における3大死因は悪性新生物（ガン）、心臓病（多くは心筋梗塞などの虚血性心疾患）、脳卒中の3疾患であるが、後二者は動脈硬化を基礎疾患とするものが大部分を占め、その進展には高血圧や糖・脂質代謝障害、喫煙、ストレスなどが関係している。高血圧自身に対しても、肥満、食塩の過剰摂取、運動不足、糖・脂質代謝異常などがリスク要因となっている。喫煙やある種の食生活が発癌のリスクを高めることも証明されている。かつて、これら一群の疾患は「成人病」と呼ばれていたが、その予防には生活習慣の改善が最も重要であり、厚生省は平成8年にこれらを「生活習慣病」と改称した。また、この呼称には、これらの疾患が中高年者の主要な死因原因であるとしても、その発症はすでに10～20歳代から始まっていることを強調する意図も含まれている。本学学生の検診結果もまさにそれを裏付けている。これら生活習慣の改善は年齢を問わず、現代社会に生きるわれわれ全てに必要な健康管理の原点とすべきものである。生活習慣の健全化は、メンタルヘルスの面でも重要である。なお、食生活に関する具体的な注意点については、当センターの小冊子「保健のしおり：食事と健康」を参照されたい。

### 感染症の新たな脅威 — 結核とエイズ

最近、仙台市内の某病院において看護婦ら11名が肺結核に集団感染して発病し、1名が死亡したというニュースが大きく報じられた。わが国では、かつて結核は亡国病といわれた程に恐れられていた。1950年代以降、有力な抗結核薬の登場により結核の治癒率は格段に向上し、新たな患者の発生も1960年代以降大幅に減少し続けた。結核はもはや過去の病気であるというような印象が医学界にさえ広まった。しかし、1980年代以降罹患率の減少傾向は鈍り、1995年度における新たな罹患者は人口10万人当たり34.3人であった。これは欧米に比べて3～6倍も多い頻度である。しかも、各種の結核治療薬に対する耐性菌が出現し、今後治療の困難な患者が増えることも憂慮されている。一方、患者の減少により、未感染者が増え、現在、わが国では20歳代で97%、30歳代でも90%は未感染とされている。これは学生諸君の大部分が未感染者で、結核に対して抵抗力が弱く、集団感染や集団発症を起こしやすい

い集団であることを意味する。特に、大学のように、授業、研究、学寮など特定の構成員で集団生活をしている環境下では、常に注意が必要である。本学でも、数年前にごく小規模な集団感染・発病と考えられた事例を経験している。全ての学生に定期検診で胸部X線撮影を義務づけているのも、このような背景があるからである。定期検診を受けることは、単に自分自身のためだけではなく、共同体の一員としての責任を果たすことでもある。

感染症の中で、エイズ（AIDS、後天性免疫不全症候群）は、極めて治療の困難な致命的な疾患である。わが国では血液製剤による感染者を別にすれば、未だ患者数が比較的少なく、学生諸君も身近な病気とは感じられないかもしれない。しかし、患者や感染者数は1991年以降急増しており、その42%は20歳代、26%は30歳代である。本症はHIV（ヒト免疫不全ウイルス）の感染によるもので、最近の主要な感染原因は異性間性交渉によるものである。20～30歳代の男性に感染者が多いのは、明らかに性的な活動度と関係している。本症は感染の機会を避ければ予防できるものであり、それに優る対処の方法はない。現在、海外ではすでに感染爆発といわれる悲惨な状況に陥っている国や地域があるが、わが国でこれを回避するためには、青少年に対する教育を徹底しなければならない。特に、大学生はその危険性を十分に認識できる立場にあり、衝動にかられて無謀な性行動を絶対にしてはならない。

## 主な行事予定

平成9年度全学教育科目授業等にかかる後期日程は以下のとおりである。

10月1日(水)～12月22日(月)	第2・4セメスター授業
10月14日(火)	履修カード提出期限
10月14日(火)	履修科目届提出期限
10月31日(金)～11月3日(月)	大学祭(1日休講)
12月24日(水)～1月6日(火)	冬季休業
1月7日(水)～1月27日(火)	第2・4セメスター授業
1月16日(金)	大学入試センター試験実施に伴う休講
1月28日(水)～2月10日(火)	補講
2月12日(木)～	学期末休業

## 学生からの投稿



## 全学教育の感想

経済学部4年生 大澤幸子

世の中には何か一つの物事に深くのめり込んでいくタイプと、いろんな事を広く浅くやるタイプの間があると思う。私はどちらかといえば後者の人間だ。そんな私にとって大学2年までの全学教育という制度は結構合っていたと思う。経済に関する講義でおもしろい所はもちろんあるけれど、私は経済だけが好きなわけではなく文学も哲学も化学も好きだ。そういう意味では高校までの授業は一般教養なるものをまんべんなくやっているといえるのだろうが、やはりどうしても大学受験を意識した内容にならざるを得ない。だから全学教育での一般教養的な科目は純粋に人の知的好奇心を満たしてくれるものであり、「物を学ぶ」という原点に近いと思う。そこが全学教育の良さだと感じている。

ただし、そこで学んだ事が自分の中でどれくらい残っているのか、という事には疑問が残る。昔の時間割を出してきて自分の受けた講義を思い出そうとしてみたが、自分がどのくらいその講義に力を入れたかとか、どんな教授だったかというような事は思い出しても、恥かしい事に自分がそこで具体的に何を学んだかさっぱり思い出せない。その理由は時間的なものなのか自分の能力的なものなのかと考えたが、周りの人に聞いても大体同じような答えが返ってきたのでどうやらそれだけではないらしい。高校の時までのように、覚える必要性がない事が逆に覚えなくても済んでしまうという作用も生み出し

てしまう。これは悪い面であるだろう。

人は時間と共に忘却してしまうが、記憶の中にははっきりと覚えている事も結構あるもので、そういう事はずっと忘れないものだ。私の中にもそういう記憶が当然あって、それらは大抵専門的でこまかい内容よりも、概念的で真理を述べているような内容が多い。こういう事を教えてくれる講義は聞いてて楽しいし、もっと知ってみたいと感じる。残念ながらこのような講義をして下さる方はあまりいない。概念や基礎は飛ばして自分の研究分野に終始してしまう方は意外に多い。全学教育ではやはり入門者へも分かりやすく心をかけて戴きたかったと思う。まず第一歩で興味を持つからこそ更に次へ進んでいけるのだから。もしそうなら（残念ながら私には無かったけれど）一生を変えてしまうような、ほんとにやりたい事にそこで出会う人もいられるかもしれない。そんな事が沢山起こったらとてもすごいと思うし、それが最初から勉強の幅を狭めてしまわない全学教育の良さの一つになっていくのではないだろうか。

何か物事を行うと大抵良い面と悪い面とがあるものだが、両方考えて私は全学教育という制度はいいと思うし、またこれからもより良くなってほしいと思っている。これから全学教育で学んでいく人のためにもこれからの期待したい。



## 私にとっての全学教育

歯学部4年生 竹屋 静 枝

私は歯学を志して大学に入学しました。将来を見据えた勉学に励めるような専門科目の充実のみならず、幅広い教養を与え、想像力、思考力を育ててくれるような教育科目との相乗効果も期待していました。専門科目、教育科目の両者があってこそ、より専門分野を理解できると思え、将来起こり得る様々な困難にも信念をもって対処できると考えていました。その意味で、専門課程と教養課程の融合ともいえるカリキュラム改造後に入学できたということは、私にとって喜ばしいことであり、歯学という学問への興味はさらに高まりました。

しかし、実際に授業が始まってみると、理想と現実とのギャップを感じずにはいられませんでした。医学の専門領域に触れられる時間数が思いのほか少なかったためです。確かに転換教育の中で受講した「歯科臨床見学」や「歯学概論」は歯学を知り、将来への予測を立てるという意味では有意義でした。しかし、いま一つ漠然としていて、前向きに歯学に取り組むという動機付けにはならないように思われました。歯科医になるという自覚を早く持ちたいと考えていた私にとっては、より多くの専門教育を受けたいと、はやる気持ちで一杯でした。また、必修科目が多く、思うように選択科目を受講できなかったということも、満足いかないことでした。

入学当初の学生は皆、自分の専攻する学問への夢で一杯です。一日も早く、その学問の広がりを知り、専門家の一員として認められたいという気持ちもあります。

この希望に満ちた時期に、より高い専門性を求める心をかきたててこそ、その後に柔軟な思考に裏打ちされた、自由な勉学意欲が生まれるのではないのでしょうか。この時期に専門科目が増加する分、教育科目の時間数は減少しますが、その分全学年に均等に分割することにより解決するのではないのでしょうか。これにより、時に専門分野から離れ、自分を見つめ直す機会も得られると思います。さらに、必修科目を削減し選択の自由化を計ること、また将来、私たちに求められるであろうボランティア活動に参加することにより、学生の自主性や個性の広がりも増すと思います。

浪人生活を経験したこともあり、私の大学に対する夢は大きく、大学側の努力や、本校の学部の分散という構造的な問題を知りつつも、一層の改善を求めていきたい気持ちで筆を走らせました。しかし、東北大という総合大学において、他学部の学生の交流が可能だったことなど、全学教育が私にとって有意義だったのも事実です。だからこそ、この時期に後輩たちが、専門性、人間性ともに高めていけたらと望んで止みません。



## 川内キャンパスでの全学教育を学ぶにあたって

工学部4年生 金田日奈子

色々と大学に関して、不安や期待に胸を膨らませていることと思いますが、そんな不安をよそに大学に入学したら、とりあえず何もわからないまま、講義は始まります。講義に関する連絡も全て掲示によりますので、自分のことは、自分でしっかり管理することが、大切です。

講義に関して言えば、大きく分けて、一般教養とよばれるものと英語と第二外国語と基礎教育科目（いわゆる数学、物理、化学的なもの）があります。一般教養は、甘く見て、勉強をしない人が結構多いと思いますが、今となって考えてみると他の学部の授業を受けられるチャンスでもありますので、興味のあるものを取るといいと思います。テストは、そう大変ではないですが、軽く見ていると落とされます。英語は、高校のときよりも簡単だとは思いますが、はっきり言って教官によります。外国の先生もいらっしゃると思いますので、本場の英語にふれたいと思う人にはお薦めです。一年生のときは、名簿で振り分けられたので、希望の所には、いけませんでした。どうしてもこの講義が受けたいと思う場合、正規の英語の時間に他の講義を受けて他組で英語を取るという手もあります。第二外国語は、これまた先生に寄りますが、全く知らない言葉を習うのでぼおっとしていると何がなんだかかわからないままどんどん進んでいくので注意して下さい。基礎教育科目は、勉強しないとテストで泣きを見ます。基本はやはり授業

だと思いますが、教官はあくまで教育者ではなくて、研究者だと言うことを頭に入れておいた方が、いいかもしれません。教科書も高校の頃のもの比べると親切ではないので、理解するのが、多少大変かもしれません。いずれにしても、私を含めたほとんどの人が、高校生の頃（若しくは、予備校生の頃）より勉強をしてないから大変なのであって、その頃の1/2でも勉強をすれば、単位を落とすこともないでしょう。

どの教科についてもいえることかもしれませんが、学習環境はあまりよいとはいえませんが、縦長の教室だと黒板は、よく見えないし先生の声も良く聞こえません。マイクを使ってくれたらいいのにも思えます。そういえば、生協でオペラグラスを売っていたような気がします。その辺は、自分なりに解決するか、若しくは教官に抗議するというのも、積極的でいいのではないのでしょうか。

最後に、よく「大学が楽しくない。」と言っている人がいますが、大学に楽しさを求めるよりも自分で楽しいこと、興味を持てることを探して欲しいと思います。今までの生活を振り返って、大学時代ほど自由な時間があって、好きなことができることはないと思います。惰性で大学生活を過ごすことがないように、今まで積極的に新しいことにチャレンジできなかった人も、少しの勇気を持って前向きな大学生活を送って欲しいと思います。



## 全学教育についての感想

経済学部2年生 大谷 建之

僕が昨年、大学に入学して最初に行ったことは、英語の雑誌を買ったことであった。もちろん、すらすら読めるとは思っていなかったが、辞書を引きながらでは大丈夫だろうという甘い期待に反して、全く読めなかった。単語が分からないだけでなく、省略が多くて文のつながりにつかめない。更に記事の話題が中東状況などで、背景や固有名詞がわからないという散々の状態であり、いくら辞書を引いても、ちっとも前へは進めない。結局、数ページを読んだか読

まないかで放り出してしまった。ところで、最近、部屋の整理をしていると一年前に放り出したその雑誌が出てきた。再び挑戦してみた。またしても全く読めない。同じ様に放り出してしまった。つまり大学生活の一年間で英語力は全く進歩しなかったか、低下したということであろう。ところが不思議なことに、昨年の英語の授業での評定は4つ全て「A」であった。実に、不思議なことである。

## 全学教育についての感想

経済学部2年生 大坂 紫

今の授業は生徒約百名。去年の少ない方でも約六十名。中学や高校のクラスの人数も最近では減らされてきているのだから、大学の講義はまだまだ英語の授業などはもっと人数を減らして欲しい。人数が多い分、進行は遅いし、授業中に質問しづらい。先生から刺激も受けにくいと思う。また人数が多すぎるとどうしても授業も受け身になってしまう。先生に名前を覚えてもらうこともないし、英語を日常的に使わない環

境で、せっきくの使える場なのだから私は少数クラスにして欲しいと思う。高校の延長線上のテキストはつまらないと思うが、学生にテキストの選択権はないし、中身もあまり選べない状況にあると思う。必修なのだから、もっと学生の興味の沸く授業を聞いて欲しい。表情やジェスチャーなども英語をやりつつ学びたいと思う。

## 全学教育についての感想

工学部4年生 赤間鉄宏

英語学習の努力の量は、それに支払われる報酬によって決まる。

入試向け英語学習では、報酬の与え方が間違っていた。入試での合格が報酬であるため、英語を使う能力のかわりに、問題を解く能力の向上に過剰な努力がなされた。

大学に入ってから、単位取得という報酬によって、より少ない努力で単位を取得できる講義に学生が集まった。

報酬の与え方を適切にする必要がある。英語

コミュニケーションの機会を与えることは適切な報酬になる。自分の過去の努力が適切に評価される上に、英語使用能力の向上のためのさらなる努力を喚起する。

この効果を利用するために、英語教官は学生を英語文化圏への一人旅にかりたてる必要がある。自分の旅行談や、学生向けの旅行計画の話をすることによって、学生は海外に飛び出さるだろう。そして、帰ってきた学生に対する講義でさらなる努力をさせればよい。

## 全学教育についての感想

工学部3年生 松本圭次

私はホテルの深夜のフロント業務のアルバイトをしている。するとやはり、外国人のお客様が訪れる時もある。そんな時、「ヨシ」と思って話をしてみようとするのだが、全く話が通じない。そんな時はアメリカに留学していたという社員の方に場をまかせる。その社員の方は先日お客様から英語で、上手ですねとほめられていた。私は横でそっと見ているだけだった。

要するに今の私の英語力では、英会話をする

事ができない。大学の教育は高校の延長だとは思えないし、実際に使われている英語を教材として使っている講義もまだまだ少ないと思う。私が今まで習ってきた英語は、フロントで会う外国人は使わないのではないかとまで思う。会話の速度についていけないのも確かだが、それ以上に単語がわからない。

私の大学の英語教育に対する意見は、もっと「使える」英語を教えて欲しいという事である。